Akita University

地域における継承的アーカイブと学習材としての活用(3)†
－松代大本営地下壕を事例として－

外池　　智*
秋田大学教育文化学部*

「本研究の目的」も含めて，以下本稿の概要を述べる．本研究は，2009（平成21）年度から推進している戦争遺跡に関する研究[1]，2012（平成24）年度から推進している戦争体験の「語り」の継承に関する研究[2]，2015（平成27）年度から推進している継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の展開に関する研究[3]の継続研究であり，さらに2018（平成30）年度から取り組んでいる地域の継承的アーカイブと学習材としての活用に関する研究[4]の一端を発表するものである．

戦後75年の歳月が経ち，戦争体験を語れる終戦時の年齢を仮に10歳とすれば，もはやその人口は全人口の５％以下となった．こうした状況の中，あの貴重な体験や記憶を残し，継承していこうとする試みが続いている．また教育現場においても，直接的な戦争体験の「語り」ではなく，そうした継承的アーカイブを活用したいわば「次世代の平和教育[5]」と呼ぶべき実践が次々と展開されている．

こうした状況を踏まえ，本稿では，戦争遺跡の学習材としての活用について特に，今回は長野市の戦争遺跡である松代大本営地下壕に注目し，この遺跡の保存と継承に深く関わってきたNPO法人松代大本営平和祈念館の取り組みとガイド養成，そして近隣学校における教育実践を取り上げたい．

キーワード：戦争遺跡，松代大本営地下壕，NPO法人松代大本営平和祈念館

1.　NPO法人松代大本営平和祈念館の取り組み
(1)　設立の経緯

自身の持つ戦争体験を語れる世代が年々減少し，「ヒト」による伝承が模索される一方で，「モノ」としての戦争遺跡はますます注目を集めている．そうした戦争遺跡の保存については，「松代大本営の保存をすすめる会」，文化財保存全国協議会，歴史教育者協議会などが中心となり1997（平成９）年に結成された「戦争遺跡保存全国ネットワーク」（出原恵三，十菱駿武両代表）が，全国を代表する組織となっている．この「戦争遺跡保存全国ネットワーク」結成の中核となり，現在でも実質的に事務局を運営している組織が「松代大本営の保存をすすめる会」（2014年にNPO法人松代大本営平和祈念館に合流）である．

「松代大本営の保存をすすめる会」は，1986（昭和61）年に設立された．戦争遺跡保存にかかわる組織としては，全国でも最も早い時期になる．前年の1985（昭和60）年に，私立篠ノ井旭高等学校（2003年に長野俊英高等学校に改名）によって象山地下壕の調査が行われ，当時の長野市長柳原正之氏に地下壕を保存するよう申し入れた．「松代大本営の保存をすすめる会」は，こうした高校生の運動を支援する目的で設立されたという[6]．例えば，昨年の館山市の事例も，その設立は地元の高校を中心とする教

2020年12月23日受理
†Satoshi Tonoike*, Application of the hierarchical archive community and learning materials（3）-A Case Study of Matsushiro Dai-mainly Owned Underground Bunkers-
*Faculty of Education and Culture, Akita University

Akita University

員によって組織的な活動が開始されていた[7]．時期的には，この松代の活動が先行するが，ともに教育現場からこうした運動が立ち上がった点には注目したい．

その後，この会の内部組織として起ち上げられた松代大本営平和祈念館設立委員会が2003（平成15）年にNPO法人となり，2014（平成26）年に「松代大本営の保存をすすめる会」と合流して発展的に解消され，現在はNPO法人松代大本営平和祈念館として活動している．全国から加入している会員は，2019（令和１）年末現在で390名程にもなるが，高齢化のため年々減少していると言う[8]．

⑵　松代大本営地下壕の概要と長野市との関わり

この会が保存を続ける松代大本営地下壕は，現在の長野市松代に位置する大地下壕である．アジア太平洋戦争末期，戦局の悪化が進み本土空襲が始まると，陸軍の一部は大本営を東京から移して徹底的な本土決戦を考えるようになった．そして，その拠点として選ばれたのが，長野県埴科郡松代町（現長野市松代町）であった．

工事は，1944（昭和19）年11月11日に極秘の内に開始され，1945（昭和20）年８月15日の終戦の日まで続行され，未完の内に終了した．地下壕は，象山，舞鶴山，皆神山を対象に碁盤の目の様に掘り抜かれ，イ・ロ・ハ各号の総延長は設計図では約13km，全有効床面積は約43,000㎡（東京ドームの1.2倍）と概算されている[9]．全行程の８割が完成していた．工事期間と完成度を鑑みれば，相当過酷なペースでの工事であった事が伺える．

建設の労働力の主体は朝鮮人労働者で，多い時には約7,000人が働いていたとされている[10]．日本人の労働者（勤労報国隊，労務報国会，学生，生徒，児童等もいたとされている）も含む最盛期の1945（昭和20）年４月頃には，約一万人が働いていたとされている[11]．現在の金額にして，総工費数千億円，延べ300万人を動員した大工事であった．

移転の内容は，「イ号倉庫」とされた象山地下壕には政府各省庁等の当時の日本の中枢部のみならずNHKや中央郵便局，「ロ号倉庫」とされた舞鶴山地下壕には大本営，「ハ号倉庫」とされた皆神山地下壕には食糧庫，そして「仮皇居」には天皇と皇后と宮内省，「チ号倉庫」には皇太子と皇太后まで移そうとしていた大遷都計画であった．

こうした松代大本営地下壕の内，象山地下壕は1989（平成１）年長野市の管理により70mが臨時公開され，さらに翌1990（平成２）年には500mが一般公開されている．

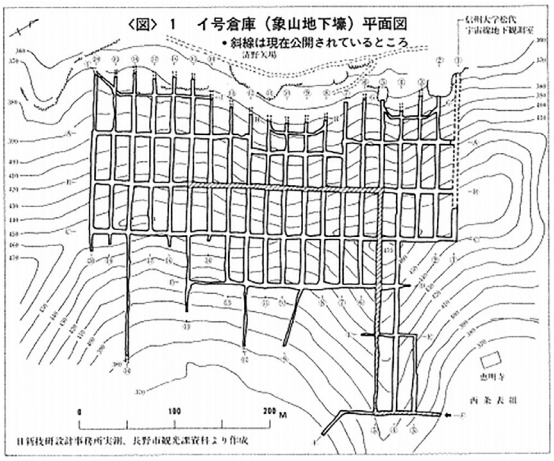
現在地下壕は長野市により１年に１回の定期点検を受け，安全管理がなされている．地下壕に対する長野市の管理事務所の関わりとしては，以下の３つが主な業務となっている[12]．

・地下壕の安全管理
・見学者の人数と所属の把握
・パンフレット作製

この地下壕は，いわば日本を代表する戦争遺跡といえるのだが，現在のところ国，県，市の文化財には指定されていない．長野市観光振興課の担当者によれば，国の文化財としては申請中であるという．

また，見学者に対する案内・ガイド業務は，NPO法人松代大本営平和祈念館が中心となって活動している．その内容については，以下詳述する．

資料１　松代大本営地下壕平面図



・（青木孝寿『改訂版　松代大本営　歴史の証言』（新日本出版社，1997年），14-1頁より転載）

⑶　松代大本営地下壕見学者とNPO法人の案内者数

見学者は，近年減少傾向にあるが，2019（令和１）年では51,625人となっている[13]．

また，全見学者の内，ほぼ３割に当たる15,082人

Akita University

が，NPO法人松代大本営平和祈念館による案内者数である．その内訳は，高校生が最も多く，全体の45.1％以上を占めている．次は中学生で全体の27.1％ほどである．小・中・高校生を合わせると，全体の83.9％を占めている．

⑷　NPO法人松代大本営平和祈念館の目的

さて，この法人の活動目的については，定款の第３条に以下の様に示されている．

この法人は，世界的に重要な第二次世界大戦の戦争遺跡である「松代大本営地下壕」の史実を，多くの人々が学び，交流する場を提供するとともに，平和の尊さを伝え，人づくりの推進を図り，地域社会の活性化及び公益の増進に寄与することを目的とする[14]．

戦争遺跡としての松代大本営地下壕を保存・継承していくだけではなく，「人づくりの推進を図り，地域社会の活性化及び公益の増進に寄与する」と述べられている通り，いわゆる“まちづくり”も目的として示されている事が見て取れる．この点は，昨年取り上げた館山市の安房文化遺産フォーラムと同様である．しかし，安房文化遺産フォーラムの場合は，むしろエコミュージアムの発想から，地域に残る文化財を総合的に活用しようとしており，より積極的であるといえる[15]．

⑸　事業の事例～「2020年度の活動方針」

例えば「2020年度の活動方針」は，大きく７つの項目で示されている．

1.平和祈念館の建設運動
2.平和をテーマとした文化活動
3.松代大本営地下壕の調査研究及びガイド活動
4.地域行政との関わり
5.国内・国際交流
6.広報活動
7.組織活動[16]

この中で，最も重要な活動は「3.松代大本営地下壕の調査研究及びガイド活動」である．この内容は，「⑴調査・研究・学習活動」と「⑵案内活動」の二つに分けられており，前者は，以下の９つの項目が示されている．

①「マツシロ学習会」（毎月第４土曜）開催．松代大本営や戦争と平和に関する課題について学習
②当時の体験や見聞の掘り起こし．学習会に組み入れる
③春のフィールドワーク
④マツシロ学習会公開講座（10月初め）
⑤「ガイド養成講座・ガイド研修会」．11月からのマツシロ学習会と兼ねて
⑥「長野空襲を語り継ぐつどい」での証言．体験者，経験者などを発掘して，聞き取り記録を残す．
⑦松代大本営関連の施設・遺構の現状調査．記録，保管
⑧長野県強制労働調査ネットワークの活動への参加調査の結果を冊子にまとめる．
⑨ガイドへの学習会，研修会への参加要請．特に若い世代のガイド増を図る．

この「⑴調査・研究・学習活動」の中で中核的位置を占めるのは，①の「マツシロ学習会」（毎月第４土曜日開催）である．この学習会は，「③春のフィールドワーク」や「④マツシロ学習会公開講座」，さらには「⑤ガイド養成講座・ガイド研修会」と兼ね合わせて実施されている．つまり，既にガイドして活動している方の自主的研鑽会であるとともに，これからガイドになろうとする人の養成講座を兼ねているのである．

またこれに関連して，「⑵案内活動」においては，「②ガイドの増員に努める．11月からの養成講座に加え，年度途中にもガイドを募集し，臨時の養成講座を開催」と示されている．前述した通り，現在のガイドは20数人ほどであり，実際に実働しているのは10人ほどで，その６割ほどが教員経験者であるという[17]．そして，ほとんどは70代であり[18]，後継者の育成が重要な課題になっている．通常のガイド養成講座は，11月から開催されるが，年度途中でも積極的にガイドを募集し，後継のガイドを養成しようとしている事が分かる．このガイド養成に関しては，後に詳述したい．

⑹　ガイド養成講座のプログラムと内容構成

小括でも述べるが，松代大本営平和祈念館によるガイド養成の最も特色ある点は，もともと組織的な体験者の「語り」が行われてこなかった点にある．

Akita University

例えば，広島市「被爆体験伝承者」の養成事業や，長崎市の「家族証言者」「交流証言者」養成事業では，既に被爆体験者がおり，基本的にはそうした体験者の「語り」を継承するものとして創設された．しかし，この松代大本営平和祈念館によるガイド養成の場合は，当初からそうした松代大本営地下壕に関わる組織的な体験者の語り部はいない状態で始められた．例えば，1991（平成３）年に亡くなった崔小岩（日本名崔元小岩）氏は，地元で唯一の強制労働体験者として請われればどんなところでもその体験を語ってきたという[19]．また，これまでも「マツシロ学習会」では，北澤善男氏[20]や鈴木伸氏[21]等，実際の松代地下壕での堀削工事体験者をお呼びし，体験者による「語り」の聴講を実施したり，ご本人への聞き取りを実施してきた．しかし，広島市や長崎市の事例の様に組織化された中で恒常的に展開されてきたわけではなった．すなわち，体験者の「語り」の伝承というより，1986（昭和61）年に設立された「松代大本営の保存をすすめる会」設立にかかわった構成メンバーによって松代大本営地下壕の価値が見出され，基本的にはその会員達の自主的調査・研究によって積み上げられた学習成果により，「語り」が実行されてきたのである．したがって，現在のNPO法人松代大本営平和祈念館が主催するガイド養成講座は，北原氏によれば1990（令和２）に地下壕が本格的に公開されたと同時に開始されたが，実質的には会員の手探りの状態で発足したのである．そして，資料２のような養成プログラムが確立したのはそれから10年ほどを経た2002（平成18）年程であったという[22]．

例えば，今年度の場合は，資料２の様なプログラムになっている．11月から３月まで，毎月１回の講座が日曜日に実施されており，計５回であるが，「ガイドになる希望をお持ちの方は，このほか毎月行われる『定例見学会』（毎月第２日曜日）にも２回以上ご参加ください」と示されているように実質的には７回以上の講座で構成されている事になる．プログラムの内容構成は，講義中心の「学習」が４回，「ガイド研修会・交流会」が１回，実際のフィールドワークが１回，そしてガイドの実地研修である「定例見学会」が２回以上の４部構成になっている事が分かる．

講習時間については，「学習」の時間の１回当たりの時間は全て13：30～16：00の２時間半ほどであり，全部で４回の開催であるので合計10時間となる．第５回目の「ガイド研修会・交流会」は２時間，実際のフィールドワークは２時間半である[23]．すなわち，１回目から５回目の総時間数は14時間半の構成になっている．

さらに，毎月第２日曜日に実施される「定例見学会」への参加を２回以上としており，実際のガイド場面への参加による実践的な講習も含んでいる事が分かる．とりわけ，この「定例見学会」は，無料でのボランティアガイドを実施しており[24]，それ故に受講者のデビューやガイドの経験を積むための場ともなっているとの事であった．

実際の受講者数は，データがないので分析することができない．しかし，北原氏によれば，多い年で６人（久保田氏の代）で，例年は２名ほどであるという[25]．

こうした松代のガイド養成の方法は，これまでの研究で取り上げてきた広島市市民局の「『被爆体験伝承者』養成プロジェクト」や長崎市被爆継承課平和学習係の「『語り継ぐ家族の被爆体験（家族証言）』

資料２　2020年度ガイド養成講座・ガイド研修会・マツシロ学習会実施予定表（毎回飼料代300円をいただきます）

	日時	内容	会場	講師	備考
①	11月22日（日） 13:30～16:00	学習　松代への大本営移転の背景① アジア太平洋戦争	きぼうの家	幅　国洋	兼マツシロ学習会 ・ガイド研修会
②	12月20日（日） 13:30～16:00	学習　松代への大本営移転の背景② 敗戦間際の本土決戦準備	きぼうの家	幅　国洋	兼マツシロ学習会 ・ガイド研修会
③	1月17日（日） 13:30～16:00	学習　松代への大本営移転の経過と全体像	きぼうの家	北原　高子	兼マツシロ学習会 ・ガイド研修会
④	2月21日（日） 13:30～16:00	学習　長野県と戦争	きぼうの家	久保田　雅文 飯島　春光	兼マツシロ学習会 ・ガイド研修会
⑤	3月14日（日） 9:30～11:30 13:30～16:00	ガイド研修会・交流会 フィールドワーク＝松代町内に残る大本営関連施設フィールドワーク	松代公民館 代官町駐車場集合	塚田晴美	兼定例見学会

※ガイドになる希望をお持ちの方は、このほか毎月行われる「定例見学会」（毎月第2日曜日）にも2回以上ご参加ください。講座修了式は、4月1日（水）きぼうの家にて企画運営委員との顔合わせを兼ねて行います。

・「2020年度ガイド養成講座兼マツシロ学習会」（2020年11月1日の北原高子氏からの提供資料）から作成。

推進事業」，そして沖縄県平和祈念資料館の「ボランティア養成講座」や沖縄県南風原町の「南風原平和ガイド養成講座」と同様に[26]，ある一定のプログラムを受講し養成する方略を取っている事が指摘できる[27]．例えば，広島市市民局の「『被爆体験伝承者』養成プロジェクト」では，最も養成時間をかけている事例で，修了までに３年必要となっている．しかし，その他の事例ではほとんどが半年から１年間の養成期間であり，今回の松代大本営平和祈念館が主催するガイド養成講座も，これらの事例とほぼ同じ期間で養成に取り組んでいる事が分かる．

さらに，前述した様に，養成と研修を兼ねた「マツシロ学習会」は定期的に開催されている．すなわち，ほぼ半年の養成課程が修了すれば終わりという事ではなく，修了後も会員相互による自主的学習会を開催することにより，研鑽を深め続けているのである．こうした取り組みは，沖縄県平和祈念資料館の「ボランティア養成講座」でも見受けられた取り組みである[28]．

2.　松代地下壕の教育的活用

さて，こうした松代地下壕をはじめとする戦争遺跡は，学校教育の中でどのように活用されてきたのであろうか．ここでは，松代地下壕の教育的活用について取り上げていきたい．

現在，長野市内には，小学校が54校，中学校が25校，高校が１校存在する[29]．研究対象校の選定にあたっては，これまでの広島市，長崎市，沖縄県の事例と同様に，まず長野市教育委員会にアプローチし，当該市内のおける活用の実態を伺ってから，代表的な実践校を紹介していただいた[30]．

長野市教育委員会学校教育課の伝田伸和氏によれば，松代大本営地下壕の近隣諸学校における教育的活用については，長野市近郊を中心に活用されているが，市内の学校に限らず，市外の学校でも積極的に活用されているとの事であった．それらの学校では，必ずしも毎年活用されているわけではなく，学校の実情に合わせて不定期に活用されているという．領域としては，やはり「総合的な学習の時間」での活用が多いとの事であった．

そして，今回特に代表的実践校として紹介していただいたのは，長野市立松代小学校と長野市立篠ノ井西中学校であった．まず，松代小学校へ電話でリサーチしたところ，実践は毎年ではないが５・６年生の「総合的な学習の時間」において，地域を知るテーマの一環として松代大本営地下壕への見学を実施しているとの事であった．しかし，今年度はコロナウィルスの影響で，その実施を見送っている[31]．

次にリサーチしたのは，長野市立篠ノ井西中学校であった．３年生を中心として「総合的な学習の時間」で松代大本営地下壕を活用した実践を実施しているとの事で[32]，訪問の了解を得た．こちらについては，後ほど詳述したい．

⑴　『歴史地理教育』における長野県の平和教育実践

まず，篠ノ井西中学校の実践を検討する前に，地域素材の教材化について，長年掲載を続けてきた歴史教育者協議会の『歴史地理教育』において，長野県の平和教育実践を取り上げた記事について検討したい．1980（昭和55）年１月号から2019（令和１）年７月号において掲載された長野県に関する平和教育実践は以下の通りである．

筆者が抽出したところ，1980（昭和55）年１月号から2019年（令和元）年７月号までに，長野県に関わる平和教育実践は全部で８件掲載されていた．校種では，小学校２件（25.0％），中学校６件（75.0％）で中学校の実践掲載が3/4を占め，最も多かった．

資料３　『歴史地理教育』における長野県の平和教育実践

月号	通巻	タイトル	実践者	実践地	校種・学年	科目・分野	地域	加害	戦後	主な学習材	特色ある学習活動
1987.8	415	「松代大本営」をどう教えたか ―掘り起こしと授業実践―	飯島春光	長野市	中・不明	社・歴	○	○		松代大本営、朝鮮人強制連行	地域調査、聞き取り
1989.12増	451	戦争遺跡オリエンテーリング ―日常的に平和教育にとりくむ―	峯村勉	信濃町	中・1	行事、国	○	○		満州開拓黒姫郷之碑、伝九郎用水連絡水路、朝鮮人少女の墓、学生寮跡、赤土採掘地跡、日本焼結工場跡	オリエンテーリング、詩作
1991.4	471	戦死者の墓石調査から十五年戦争を	桂木恵	真田町	小・6	不明	○	○		墓石	墓石調査，聞き取り
1991.8	475	飯田・下伊那の戦争遺跡	唐沢慶治	大鹿村	中・3	不明	○	○		『飯田・下伊那の戦争遺跡』作成・発刊、満州移民	戦争慰霊碑見学、聞き取り
2000.12	617	十五年戦争と満蒙開拓	高木元治	中野市	小・6		○	○		満蒙開拓団、青少年義勇軍	忠魂碑見学、聞き取り、VTR、講話
2001.6	625	日本の一般民衆に戦争責任はあるのか	宮澤良雄	望月町	中・3	選社	○	○			ディベート、聞き取り
2001.12	632	どうやって国民を戦争に動員したか (授業記録ではなく自身の回顧録)	池田錬二								
2018.10	885	松本大本営の掘り起こしと授業に取り組んで(1)	飯島春光	長野市	中・1	学級展	○	○		松代大本営、戦没者名簿	地下壕見学、展示
2018.11	886	松本大本営の掘り起こしと授業に取り組んで(2)	飯島春光	長野市	中・3	学級展	○	○		松代大本営、勤労動員、従軍慰安婦	地下壕見学、聞き取り、展示

・歴史教育者協議会編『歴史地理教育』(歴史地理教育者協議会)の1980年1月号から2019年7月号の実践報告から作成。
・「地域」は、授業実践が地域素材を題材として扱っているもの
・「加害」は、アジア太平洋戦争を加害的側面から取り扱っているもの
・「戦後」は、題材として戦後の内容を取り扱っているもの

Akita University

また，全ての実践が，加害的側面を取り扱った実践であり，また地域素材を題材とした実践であった．例えば，昨年取り上げた千葉県の事例の場合，加害的側面を取り扱った実践は11件（61.1％），地域素材を題材とした実践では７件（38.9％）と比較すると，長野県の場合は十分に“『歴史地理教育』らしい”掲載状況といえる．一方で，「次世代の平和教育」の特色として指摘している戦後の取り扱いについては，１件も事例がなかった．

また，松代大本営地下壕以外の題材としては，満蒙開拓団に関わる題材を扱った実践事例が３件（37.5％）あり，長野県の特色であろう．満蒙開拓団として満州にわたった人は約27万人に上るとされているが，その内，約37,800人（14％）と長野県が最も多く，２位の山形県（約14,200人）を大きく引き離している[33]．こうした歴史的背景が，長野県の実践に表れている．

さて，松代大本営地下壕を取り上げた実践は３件（37.5％）であり，全て飯島春光氏によるものである事が分かる．校種は，全て中学校である．飯島氏は，長野県の公立中学校教諭を長年務め，1986（昭和61）年に設立された「松代大本営の保存をすすめる会」の創設メンバーであり，現在もNPO法人松代大本営平和祈念館の中心的メンバーとなって活躍している．飯島氏による実践は，「『松代大本営』をどう教えたか－掘り起こしと授業実践－」（415号，1987年）は社会科教育での実践であるが，「松本大本営の掘り起こしと授業に取り組んで⑴」（885号，2018年）と「松本大本営の掘り起こしと授業に取り組んで⑵」（886号，2018年）は，学校の文化祭における学級展による取り組みである．

⑵　飯島春光氏による授業実践

①単元構成とその特色

ここでは，特に飯島春光氏の社会科の授業実践報告である「『松代大本営』をどう教えたか－掘り起こしと授業実践－」を取り上げ，検討していきたい．

飯島氏によれば[34]，まず1982（昭和57）年に初めて中学生を連れての地下壕見学を実施したという[35]．前述した様に，地下壕の本格的な公開は1990（平成２）年からになるので，まだ一般公開される８年も前に実施した事になる．すなわち，こうした飯島氏達による地下壕の教育的活用が地域に徐々に認知され，やがては一般公開へと結びついていったのである[36]．

そして，1986（昭和61）年に３年４組を対象として，初めて社会科の授業として実施した[37]．この『歴史地理教育』415号（1987年）の掲載記事は，この時の実践を掲載したものである．すなわち，飯島氏の授業実践としては，極初期段階での授業という位置付けになる．その意味で，飯島氏のその後の授業実践の基礎となった授業モデルと言えよう．

さて，この授業の単元全体の構成を紹介したい（資料４参照）．「時」として15の「主題」が挙げられているが，「3　満州事変」は「2時間扱い」となっており，さらに掲載記事の中では，「12　松代大本営」は２時間扱いになっているので，実質は全部で17時間構成になっている[38]．この単元構成から見て取れる特色，そして単元構成の趣旨は，以下の３点である．

まず，特色として「主な授業内容」がほとんど問いを投げかける設定になっている点である．例えば，「1　暗黒の木曜日（世界恐慌）」では「①恐慌でアメリカに何が起こったか．各国では？人々の生活は？」，「②原因は何か．アメリカだけでなく他国にもおこったわけは？ソ連は？」等である．授業の内容設定として，生徒達に問いを投げかける形式にしたのは，飯島氏本人によれば生徒達に何よりも考えてほしかったからだったという．それぞれの項目について，基礎的な知識を身に付けるより，しっかりと思考する力を付けてほしかったので，こうした問いを投げかける形式として表記したとの事であった[39]．

次に，戦争遺跡である松代大本営地下壕の取り扱いについてである．筆者は，松代大本営地下壕という地域の貴重な戦争遺跡を取り扱っているにもかかわらず，全17時間の内，２時間分しか割り当て時間がない点については，疑問に感じていた．そこで，ご本人に確認したところ，授業の流れとして「12　松代大本営」は「11　強制連行・労働」に続く位置付けであり，当時日本全体で展開されていた強制連行をまず取り上げ，次に生徒達にとっての身近な事例として「12　松代大本営」を位置付けていたとの事であった．秋田県の花岡事件にも代表される通り，強制連行や徴用の問題は当時全国的に展開されており，長野市の生徒達のすぐ身近なところでも実行されていたのだという事例として位置付けていたとの事であった．

Akita University

資料４　飯島春光氏の「十五年戦争学習の単元展開」

時	主題	主な授業内容
1	暗黒の木曜日（世界恐慌）	①恐慌でアメリカに何が起こったか。各国では？人々の生活は？ ②原因は何か。アメリカだけでなく他国にもおこったわけは？ソ連は？ ③各国の対策。
2	ヒトラーの登場	①どのようにして独裁者になったのか。独裁者になるとどんなことを始めたのか。 ②各国はどう対処したか（人民戦線の動き）。
3	満州事変（2時間扱い）	①恐慌下の日本の世の中。 ②会社・工場・農産物価格はどうなったか？ひとり利益をあげた財閥とは？どうやって大きくなったか。 ③中国で何が起きたか。「満州は日本の生命線」という宣伝を国民はどう思ったか。 ④満州事変のきっかけは？日中両政府の態度は？ ⑤事件後の日本・中国・国際連盟の動き。
4	日本のファシズム	①5・15事件、2・26事件とは？おこした人たちはどんなことを考えていたか。 ②事件後、政治はどんな方向に進んでいったか。
5	日中戦争	①満州事変後中国では2つの勢力が日本に立ち向かうことになる。どんな勢力でねらいは？ ②1937.7.7日本はどのように中国との全面戦争に入っていったか。日本政府の見通しは？中国の態度は？ ③日本は中国・朝鮮で何をしたか。中国はどうしたか。
6	強まる戦時下体制	①「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません勝つまでは」というスローガンが出た。ねらいは？（法律、政党や組合の解散、日用品の統制） ②国民は文句を言わなかったか？
7	第二次世界大戦(1)	①その後のドイツの動きは？併合しようとした国、条約を結んだ国、1939年に侵略した国。占領していった国・ところ。 ②占領された地域の人々はどうしたか。
8	太平洋戦争	①1940～1941年日本のやったことは？そのねらいは？ ②これに対し米・英は何を要求したか。交渉は？ ③太平洋戦争はどのようにして始まったか。日本はどこに進出？ ④東南アジアで日本は何をしたか。
9	第二次世界大戦(2)	①ヨーロッパではドイツはどんな行動に出たか。独ソ戦の結果は？ ②その後、アメリカ・ソ連はどう動いたか。
10	戦時下の国民生活	①赤紙が来た家はどうなっていったか。（本人は？家族は？） ②子どもたちはどうなっていったか。男たちがいなくなったあと、工場や炭鉱で働いたのはだれか。
11	強制連行・労働	①朝鮮人や中国人をどのように連行し、どこで強制労働させたか。 ②どのように働かせ、扱ったか。 ③木曽や花岡鉱山での実態と抵抗。
12	松代大本営	①松代大本営工事とは？ ②工事にたずさわった人々はどんな人か。 ③戦争末期になぜこんなものをつくったのか。
13	空襲と沖縄戦	①連合軍はどう反撃？（ミッドウェーからトラック） ②日本本土空襲（東京大空襲、長野空襲） ③沖縄はどのように攻撃されたか。日本軍はどうしたか。
14	原爆	①原爆が投下された。その被害は？ ②いまもなお苦しむ人々はどうなっているか。 ③アメリカはなぜ原爆を投下したか（ポツダム宣言までの連合国・天皇・軍・政府の動き）
15	敗戦	①敗戦のニュースを聞いて、日本・アジアの人々は？ ②大戦はどんな被害（死者）をもたらしたか。（日本、アジア、ヨーロッパ、東北地区） ③戦争を私たちはどう受け止めるか。

・飯島春光「『松代大本営』をどう教えたか―掘り起こしと授業実践―」歴史教育者協議会編『歴史地理教育』№415、（歴史教育者協議会、1987年）の54頁、「十五年戦争の単元展開」を抜粋。

最後に，この単元の力点についてである．この単元で授業者の力点を置いたのは，やはり特別に２時間扱いになっている「3　満州事変」とこれと関連しての「15　敗戦」であるという．「3　満州事変」では，満州事変の勃発から満州国設立，国際連盟の脱退といった一連の流れを学習するのだが，それに伴った満州開拓移民についても取り上げる．前述した様に，長野県は満蒙開拓移民団として最も多く県民を送り出した県であり，篠ノ井西中学校の校区でも当然例外ではなかった．この単元では，こうした生徒達の身近な題材を取り上げ，まず満州移民として現地に赴くことを追体験的に学習するのである．さらに，「15　敗戦」では，そうして満州国へ赴いていった人たちは敗戦によってどうなったのかを扱う内容になっているという．こうした満州開拓団の取り扱いは，当然その題材が篠井西中学校では身近な地域素材として意義があったというだけではなく，実は，むしろこの満蒙開拓移民団に端を発する中国人残留孤児など，中国からの引揚者や中国からの帰国者が学区におり，在校生の中でのいじめ問題にもつながっていた背景があったからだという．篠ノ井西中学校に赴任した若き日の飯島氏は，こうした学校の現状を鑑み，きちんとした歴史認識に基づく授業が必要であると痛感し，こうした授業に取り組んだのである．

②授業「松代大本営」

次に，「松代大本営」の部分を取り上げてみたい．この授業の目的は，「主眼」として以下の様に示されている．

太平洋戦争末期に大本営などを松代を中心とする善光寺平一円に移そうとする工事が，地域の人々や朝鮮人労働者を動員し，住民の強制立ちのきを行うなどして行わ

Akita University

れたことをつかませ，なぜこの工事が行われたのかを考えさせる．

生徒達は，松代大本営地下壕が身近な地域素材であっても，授業の中で体系的に学習しているわけではない．そのため，まず工事の実相を理解させ，次に「なぜこの工事が行われたのか」を考察させるといった二段構えの構成にしているのである．

次に，2時間の内容構成であるが，「主眼」でも示されている通り，1時間目は松代大本営地下壕工事について，資料を「見てわかったこと，疑問点を出し合う」学習，2時 間目は，「なぜこの工事が行われたのか」を討議し考察させる学習として構成されている．

特に1時間目では，ビデオ，家族への聞き取り，和田登『悲しみの砦』（岩波書店）抜粋，地元の人々や朝鮮人労働者崔本さんの証言，清野小学校日誌，現地写真および地図・見取図というように，かなり多種多様な資料が用いられている．視聴覚資料や聞き取り，文献資料や地図など，多様な資料の活用により，この工事を理解させようと工夫している事が分かる．

また2時間目では，そうした1時間目で習得した事実に基づき，生徒達同士での討議を展開している．いわば，対話的な授業として構成しているのである．

③その後の授業の改良

飯島氏の授業は，こうした1986（昭和61）年での実践を皮切りに，篠ノ井西中学校での勤務18年間の中で繰り返し実践され，改良されていった．

飯島氏本人への聞き取りによれば，最終的な内容構成としては，以下の3点が柱となり，構成される内容になったという．

まず基礎となるのは，社会科と「総合的学習の時間」を連関し，そこに飯島氏の特別授業を単発的に加える構成である．社会科では，基本的には前述した様な十五年戦争学習を展開し，「総合的な学習の時間」では，満州移民や松代大本営地下壕における朝鮮人労働者の現状，そして地下壕の見学など，活動的内容を構成し，さらにこれに関連して飯島氏の特別授業が展開される構成である．

2点目は，夏季休業を活用した新聞作成である．生徒達は，満州移民や松代大本営地下壕の題材を中心に，それに関連した課題も含めて調べ学習などの探究的学習を展開する．それを，夏季休業中の課題として新聞にまとめるのである．こうした新聞は，製作活動，表現活動として展開され，次の文化祭で公開される．

最後は，文化祭での発表である．これまでの学習成果を集大成し，文化祭の場でパワーポイントなどを活用して発表するのである．

飯島氏の授業は，前述した『歴史地理教育』415号（1987年）に掲載された1986（昭和61）年の実践を皮切りに実践されてきたが，最終的には上記のような内容構成として結実したのである．

⑶　篠ノ井西中学校における授業実践

①本年度の「総合的な学習の時間」の目標

次に，現在の長野市立篠ノ井西中学校の授業実践について取り上げたい．

前述した様に，篠ノ井西中学校は飯島春光氏が長年勤務し，その授業実践を積み上げてきた学校である．しかし，現在飯島氏は定年退職し，その後の再任用も終わり2018（平成30）年の3月には篠ノ井西中学校を去っている．篠ノ井西中学校では，これを契機にこれまでの実践を見直し，新しい内容構成としてリニューアルしている．

本年度の篠ノ井西中学校の「総合的な学習の時間」の全体計画によれば，目標を以下の様に示している[40]．

探求的な見方・考え方を働かせ，地域の人，もの，ことに関わる総合的な学習を通して，目的や根拠を明らかにしながら課題を解決し，自己の生き方を考えることができるようにするために，以下の資質・能力を育成する

特に平和教育に力点を置いているわけではない事が分かる．むしろ，来年度から中学校で全面実施される2017（平成29）年度版の新学習指導要領の趣旨に忠実に添い，「探究的な見方・考え方」の育成を重視し，新たに再編された三観点（知識・技能，思考・判断・表現，学びに向かう力・人間性等）によって，育成するべき資質・能力を示している[41]．

②本年度の「総合的な学習の時間」の内容構成

全体計画では，1年生50時間，2年生70時間，3年生70時間で計画されている．特に注目したいのは，1～3年生の共通した「探求課題」として，「地域

Akita University

の実情から，過去の戦争の歴史を知り，現在の課題と向き合い，未来への思いを抱く」を設定している点である．特に平和教育に重点を置いているのではなく，地域学習の展開の中で，「過去の戦争」を課題として取り上げる構成にしている事が分かる．

特に，「平和学習」の部分に着目して「＜各学年の計画＞」を見てみると，１年生では５月に「平和学習（2h）」として「蒼い記憶の視聴」が設定されている[42]．１年生では，この「平和学習」はこの部分だけで計画されており，その他の内容は，「情報教育」「新聞から学ぶ」「身近な人の生き方に学ぶ」「働く人の思いに触れる」など，ICT教育や，キャリア教育の内容で構成されている．

続く２年生では，やはり５月に「平和学習（2h）」として「満蒙開拓における日本と中国の関係を知る」が設定されている．１年生に引き続き満蒙開拓に関わる内容である．２年生においても，「平和学習」はやはりこの部分だけで計画されており，その他の内容は，「職場体験学習に向けて」「修学旅行に向けて」等，やはり１年生に引き続きキャリア教育や修学旅行の事前学習などが中心的の構成されている．

そして，３年生ではやはり５月に「平和学習（2h）」として「戦争にかかわった人の思いに触れる」，さらに「松代大本営跡見学（3h）」，さらに６月にも「平和学習（2h）」として「松代大本営跡見学」が計画されている．前掲註40に示した通り，今年度の７月の時点での千野布美子教頭からの提供資料に基づくもので，年度当初ではこうした計画であった．周知の通り，今年度は新型コロナウィルスの影響で，ことごとく行事や大会は中止され，当然こうした校外学習の実施は危ぶまれた．しかし，長野市が無料でバスを提供したこともあり，実際には９月に１日の日帰りで実施する事ができた[43]．篠ノ井西中学校の３年生は６クラスあり，長野市内でも３番目のマンモス校である．校外学習として，松代大本営地下壕と上田市の無言館，そして各クラスで選出したもう一か所を加えた３カ所を１日で周る内容で実施された．

③前年度（2019年度）の「総合的な学習の時間」の内容構成

前述した通り，この篠ノ井西中学校には18年間にわたり飯島春光教諭が勤務し満蒙開拓や松代大本営地下壕を中心とした平和教育実践を積み重ねてきた．しかし，2018（平成30）年に飯島氏は同中学校を離れる事になり，これまでの内容の見直しを余儀なくされた．

特に篠ノ井西中学校から提供された資料の内，「職員会資料　平成31年度　総合的な学習の時間（案）H31.4.17」に注目してみたい[44]．

「2　本年度の実施事項（案）」から学年の内容を見てみると，基本的な構成は2020（令和２）年度とほぼ同じである事が分かる．

しかし，特に注目したいのは，「＜平和学習について＞」である．「基本方針」として，「これまで本校で行ってきた，３年生での平和学習を，１年生より段階的に３年間かけて学習する内容とする」と示されている通り，改訂のポイントとして，それまで３年生を中心として進められてきた「平和学習」を，「1年生より段階的に３年間かけて学習する内容」に改めている事が分かる．

さらに，「カリキュラム再編に向けてのポイント」においては，「特定の講師に頼るのではなく，地域とのつながりも大切にしながら，毎年職員集団が変わっても同じように指導ができ，生徒の学習が深まるような学習展開の流れを作っていく」と明記されている．これまで中心的にかかわってきた飯島氏が学校を離れ，もはや「特定の講師に頼るのではなく」，「毎年職員集団が変わっても同じように指導ができ」るよう，工夫を施すことが重視されている事が分かる．

しかし，「平和学習」の基本的な趣旨は，「基本方針」には「『中国では日本人と言われ，日本では中国人と言われる』同じような悲しい思いを抱く生徒が二度と出ないでほしい」として，さらに「カリキュラム再編に向けてのポイント」にも「中国に由来する生徒の多い地域であるため，職員も正しい知識を持つことを大切にする」と示されており，篠ノ井西中学校の地域や在校生の実情に対応した「平和教育」を実施しようとしている点は変わりない事が確認できる．

3.　小括

以上，戦争遺跡の学習材としての活用について，特に長野県長野市の松代大本営地下壕の事例を取り上げて検討してきた．最後に，小括として以下の３点を指摘しておきたい．

まず，継承的アーカイブと創出的アーカイブにつ

Akita University

いてである．この点については，実は昨年の館山市の事例でも既に指摘している点であり，今回の松代の調査・研究を進めたことによって，改めて指摘しておきたい点である[45]．例えば，広島の「被爆体験伝承者」養成や，長崎市の「家族証言者」「交流証言者」養成の場合は，既に被爆体験者自身が「語り部」として活動しており，それを継承する活動として展開されてきた．しかし，今回の松代の事例や前回の館山市の事例の場合は，そうした体験者による「語り」活動は組織的には展開されてこなかった．市民の主体的活動として，松代大本営平和祈念館の方達や安房文化遺産フォーラムの方達による地域の戦争遺跡の掘りおこし活動，また自主的な調査・研究と研鑽会により掘り起こされ，見出された歴史的事実に基づいてガイド活動が組織化されていったのである．既に継承するべき活動が前提にあって展開されている活動ではなく，むしろ地域の人々によって創出され，その意義が見出された活動であると言える．その意味で，継承的アーカイブではなく，創出的アーカイブと言えるのである．確かに，広島，長崎といった日本のみならず世界的，人類的に代表される被爆体験は必然的に注目されるし，その継承活動も活発に行われている．しかし，地域に眠る戦争遺跡やそれにまつわる「語り」は，それを掘り起こし，意義を見出し，そしてその価値が認定される活動へと結び付けていかなければ，やがて埋もれて消えていくばかりである．今回の松代大本営平和祈念館の活動や前回の安房文化遺産フォーラムの活動は，そうした地域の貴重な戦争遺跡に注目し，その価値を見出し後世に継承しようとする貴重な取り組みであると言える．

次に指摘したいのは，ガイドツールについてである．今回の松代大本営平和祈念館の養成プログラムでは，修了時に実際にガイドをする時に用いる資料一式をファイルにして渡すことになっている．そこには，地図や写真，文献資料等，これまでの松代大本営平和祈念館の調査・研究活動によって見出された歴史的事実や証言，史資料が一式用意されている．すなわち，このファイルを基に，松代大本営地下壕を入り口から見学していけば，一通りのガイドが実施できるようになっているのである．これは，誰がガイドを行っても一定のガイドができる事を担保するツールであると共に，個人の見解が入る事によるガイドの“ブレ”を防止するものでもある．こうした工夫は，実はひめゆり学徒隊が活動した南風原町の病院壕に関わる「南風原平和ガイドの会」のガイド養成においても工夫されていた点であった．このガイド養成においては，病院壕の地点ごとにガイドする“シナリオ”が作成されており，常に一定のガイドが担保されるよう工夫されていた[46]．松代のガイドツールも，基本的はこうした“ブレ”のない，人が変わっても誰がやってもなるべく違いの出ないガイドを続けるための工夫である事が指摘できる．そして，このガイドツールは，会員の自主研鑽，調査・研究が推進される事により，さらに新しい事実や新しい解釈が見出されれば，次々に更新されていくのである．今後の継承的アーカイブを考える上でも，示唆に富む工夫である．

最後に，こうした地域の教育資源の学校教育における活用について述べたい．筆者は，既にこれまでの研究の内，特に広島市の「平和教育プログラム」や長崎市や沖縄での平和教育実践を通じて，「次世代の平和教育」の特色について論じてきた．そして，その特色として，(1) 継承的アーカイブの活用，(2) 戦後の平和希求活動への着眼，(3) 目的的平和教育から方法的平和教育への３点を指摘してきた．この３つの視点から，改めて長野市松代の事例を検討してみたい．

まず，「(1) 継承的アーカイブの活用」の視点からである．前述した様に，今回の松代大本営地下壕の事例では，継承的アーカイブと言うより創出的アーカイブと呼ぶべき事例であった．しかし，いずれにしても地元の諸学校では，既に1980年代にはこの地域素材に着目し，むしろ学校現場からそのアーカイブと学習材としての価値を見出していた事が分かる．その意味で，まさに教育実践から創出されたアーカイブであり，学習材として十分活用してきた事が指摘できる．

次に，「(2) 戦後の平和希求活動への着眼」の視点からである．今回の事例では，特に松代大本営地下壕にかかわる内容より，むしろ満蒙開拓団の内容においてまさに戦後の取り組みが大きく取り上げられていた事が分かる．飯島氏の事例でも示した通り，むしろ取り組みの契機となったのは，篠ノ井西中学校を取り囲む当時の中国との関わりの問題であった．実際の子ども達の状況，その背景にある地域の現状に向き合った事で，こうした実践が生まれたのである．すなわち，“その時何があったのか”に着

Akita University

眼するだけではなく，“その時”に起こった歴史的事象に対して，これまで地域の人々がどう向き合って来たのかという「(2) 戦後の平和希求活動への着眼」の観点があったからこそ展開されてきた実践である事が指摘できる．

最後に，「(3) 目的的平和教育から方法的平和教育へ」の観点からである，平成から令和の時代を迎え，これまで教育現場を支えてきた50代・60代の教員から次世代の教員達へとバトンが渡されている．そうした中，篠ノ井西中学校においても，18年間にわたり同校の平和教育実践を支えてきた飯島氏から次の世代の教員へと教育実践の担い手が移り変わってきた．生まれ変わろうとする教育実践では，既に示してきた様に，これまでの実践を活かしながらも新指導要領の内容を鑑み，知識･技能，思考･判断･表現等の資質・能力の育成の観点を取り入れた実践になっていた．すなわち，平和の実現を目的にするばかりではなく，地域素材を題材として子ども達の資質・能力の育成にも力点を置く実践へと対応している事が見て取れたのである．まさに，「次世代の平和教育」への取り組みの事例である事が指摘できる．

---

[1] 2009-2011年度科学研究費補助金基盤研究（C)「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」（課題番号：21530972）．その内容は，拙著『2009-2011年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用』（暁印刷，2015年）としてまとめている．

[2] 2012-2014年度科学研究費補助金基盤研究（C)「戦争体験『語り』の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用」（課題番号：24531174）．その内容は，拙著『2012-2014年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　戦争体験「語り」の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用』（2015年，暁印刷）としてまとめている．

[3] 2015-2017年度科学研究費補助金基盤研究（C)「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の構築」（課題番号：15K04475）．その内容は，拙著『20015-2017年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　継承的アーカイブの活用と「次世代の平和教育」の構築』（2018年，八郎潟印刷）としてまとめている．

[4] 2018-2022度科学研究費補助金基盤研究（C)「地域における継承的アーカイブと学習材としての活用」（課題番号：18K02606）．

[5]「次世代の平和教育」については，前掲註３の報告書にまとめている．その特色として，以下３点を指摘した．

(1) 継承的アーカイブの活用
(2) 戦後の平和希求活動への着眼
(3) 目的的平和教育から方法的平和教育へ

[6] 青木孝寿『改訂版　松代大本営　歴史の証言』（新日本出版社，1997年），254-255頁，259頁，及び飯島春光「松代大本営の掘りおこしと授業の取り組んで(1)」歴史教育者協議会編『歴史地理教育』№885，（歴史教育者協議会，2018年），81頁，松代大本営の保存をすすめる会編『松代大本営ガイドブック　マツシロへの旅（新版)』（松代大本営の保存をすすめる会，1995年），23-24頁参照．

ちなみに，長野県下では，1990（平成２）年には，既に『飯田・下伊那の戦争遺跡』が長野県歴史教育者協議会下伊那支部によって刊行されている．全国での文化財としての戦争遺跡の指定が，1990（平成２）年の沖縄県南風原町のいわゆるひめゆり部隊に関わる沖縄県陸軍病院南風原壕である事を鑑みると，地域における戦争遺跡の掘りおこしについては，長野県が全国でも最も早く盛んに実施された地域である事が分かる．

[7] 拙著「地域における継承的アーカイブと学習材としての活用(2)－『館山歴史公園都市』構想と『館山まるごと博物館』を事例として－」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要編集委員会編『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第42号，（秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター，2020年），1-13頁参照．

[8] NPO法人松代大本営平和祈念館の北原高子氏からの聞き取り（2020年６月15日に電話にて）による．

[9] 青木孝寿『改訂版　松代大本営　歴史の証言』（新日本出版社，1997年），13頁，129-134頁参照．

[10] 同上書，12-13頁，121-134頁参照．

[11] 同上．またこうした労働力確保の問題に加えて，特に仮皇居の建設に当たっては，周辺の地域住民109戸124世帯約600人に対する強制撤去も実施された．同上書，85-92頁参照．

Akita University

[12] 長野市役所観光振興課の小林大樹氏からの聞き取り（2020年７月29日に電話にて）による．

[13]「2019年ガイドのまとめ」「②入豪者の推移」NPO法人松代大本営平和祈念館編『NPO法人松代大本営平和祈念館ニュース　保存運動』第342号（NPO法人松代大本営平和祈念館，2020年２月10日），３頁参照．以下の統計も同様．

[14] NPO法人松代大本営平和祈念館HP（http://matushiro.la.coocan.jp/）の「定款」より引用．2020（令和２）年６月５日閲覧．

[15] 前掲書７参照．

[16] NPO法人松代大本営平和祈念館編『保存運動』第343号，（NPO法人松代大本営平和祈念館，2020年４月10日），2-4頁参照．

[17] 2020（令和２）年10月31日の久保田雅文氏（当日実際に地下壕を案内いただいた方），また11月１日の北原高子氏からの聞き取りによる．

[18] NPO法人松代大本営平和祈念館の北原高子氏からの聞き取り（2020年６月５日に電話にて）による．

[19] 前掲書９，203-205頁，258頁参照．

[20]「《マツシロ学習会》『地下壕堀削工事の体験』北澤善男さん（87歳）の体験を聞く」NPO法人松代大本営平和祈念館編『NPO法人松代大本営平和祈念館ニュース　保存運動』第316号，（NPO法人松代大本営平和祈念館，2017年７月10日），1-3頁，及び「第12回戦争体験を語るつどい－歴史に学び，教訓を語り継ぐ－」NPO法人松代大本営平和祈念館編『NPO法人松代大本営平和祈念館ニュース　保存運動』第341号，（NPO法人松代大本営平和祈念館，2020年１月10日），2-3頁参照．

[21]「鈴木伸さんのメッセージ」NPO法人松代大本営平和祈念館編『NPO法人松代大本営平和祈念館ニュース　保存運動』第320号，（NPO法人松代大本営平和祈念館，2017年12月10日），2-3頁．

[22] NPO法人松代大本営平和祈念館事務局取材・調査時の北原高子氏への聞き取り（2020年11月１日の）による．

[23] 筆者も実際に2020（令和２）年10月31日（土）に象山地下壕と舞鶴山地下壕を案内していただいた．ガイドをしていただいたのは，NPO法人松代大本営平和祈念館理事であり「戦争遺跡全国保存ネットワーク」事務局次長の久保田雅文氏である．象山地下壕の案内はほぼ１時間半，舞鶴山地下壕の案内は１時間ほどであった．

[24] 通常3,000円のガイド料を徴収する事になっている．

[25] 前掲註22の北原氏への聞き取りによる．

[26] それぞれの養成プログラムについては，前掲註２，３の報告書を参照されたい．

[27] 例えば，昨年取り上げた館山市の安房文化遺産フォーラムの場合は，ある一定のプログラムを受講し養成されるものではなかった．ただし，実際にガイドを実施するには，スタディーツアーの内の「座学」と呼ばれる講習を必要最低限受講する必要があるとされている．スタディーツアー参加時の愛沢伸雄氏，池田恵美子氏，河辺智美氏（専従事務局）からの聞き取り（2019年６月８・９日）による．前掲書７参照．

[28] 前掲註２報告書参照．

[29] 長野市教育委員会HP「長野市小・中・高等学校一覧」による．（https://www.city.nagano.nagano.jp/soshiki/gakukyou/153828.html）2020年７月12日閲覧．

[30] 長野市教育委員会学校教育課の伝田伸和氏への電話での聞き取り（2020年７月13日）による．

[31] 長野市立松代小学校教頭の山岸ともみ氏への電話での聞き取り（2020年７月13日，29日）による．

[32] 長野市立篠ノ井西中学校教頭の千野布美子氏への電話での聞き取り（2020年７月13･14日）による．

[33]「満蒙開拓団　殉難者拓魂　長野県」（https://www.asahi-net.or.jp/~un3k-mn/0815-manmou-a05.htm）参照．2020年７月12日閲覧．

[34] 長野市調査・研究の際の飯島春光氏への聞き取り（2020年11月１日）による．

[35] 連れて行ったのは１年３組の生徒達で，その後この取り組みは文化祭での発表として結実していった．同上の聞き取りによる．

[36] 1987（昭和62）年には，初めて保護者も参加したという．同上の聞き取りによる．

[37] 1986（昭和61）年６月に授業を実践し，８月の歴史地理教育者協議会の全国大会で発表したという．同上の聞き取りによる．

[38] この点は，同上の飯島氏への聞き取りにより確認している．

[39] 同上の飯島氏からの聞き取りによる．

[40] 長野市立篠ノ井西中学校教頭の千野布美子氏から

Akita University

の提供資料（2020年７月13日）「令和２年度　篠ノ井西中学校　総合的な学習の時間　全体計画」より引用.

[41] 同上書参照.

[42] この「蒼い記憶」は，長野県満州開拓自興会の全面的監修により満蒙開拓団（高社壕，更級郷，埴科郷）満蒙開拓青少年義勇軍（頓所中隊）等の実話をもとに製作された作品である．満州移民の時代的背景，少年たち（現地では義勇隊と呼ばれた）が学校でどのように勧誘され，満州へ送られたか，入植した土地は現時の方の土地を奪ったものである事等の事実が描かれている．長野市立篠ノ井西中学校訪問時での提供資料「平成30年度　平和学習計画（案）」による.

[43] 長野市立篠ノ井西中学校校長の鎌田健二教諭，齋藤貴弘教諭からの聞き取り（2020年11月２日）による.

[44] 長野市立篠ノ井西中学校校長の鎌田健二教諭の聞提供資料（2020年11月２日）「平成31年度　総合的な学習の時間（案）」による.

[45] 昨年調査した千葉県館山市の事例をまとめた前掲書７の論文では，「創出的アーカイブ」ではなく，「開発的アーカイブ」としていた．これは，特に安房文化遺産フォーラムの取り組みが，地域の戦争遺跡ばかりではなく，南総里見八犬伝や青木繁の絵画等，地域の教育資源を活用し，エコミュージアムとして“開発”してきた経緯を踏まえて，「開発的アーカイブ」としたものであった．しかし，今回の松代の事例を鑑みた時，やはり地域の価値を見出し，創出してきたという意味で「創出的アーカイブ」と言い換えた.

[46] 前掲註２の報告書参照.

Summary

his study is based on research on war ruins that have been promoted since 2009, on the succession of "narratives" of war experiences that have been promoted since 2012, and from 2015. This is a continuing study on the development of "next-generation peace education" utilizing the inherited archives, and presents a part of the research on the use of "next-generation peace education" as an inherited archive and learning material in the region that we have been working on since 2018.

After 74 years of the war, if the age at the end of the war, which can be talked about the war experience, is 10 years old, the population is no longer about 8% of the total population. In this situation, attempts to preserve those precious experiences and memories and try to inherit them continue. In addition, in the educational field, rather than the "story" of the direct war experience, so to speak, the practice to be called "the next generation of peace education" utilizing such an inherited archive is being developed one after another.

In light of this situation, in this paper, I would like to focus on the use of war ruins as learning materials, this time focusing on the Matsushiyo Dai-mainly managed underground bunker, which is a war site in Nagano City, and taking up the efforts and guide training of the Matsushiro Dai-honei Peace Memorial Hall, which has been deeply involved in the preservation and succession of this site, and educational practice in neighboring schools.

Key Words : War Ruins, Matsushiyo Dai-mainly managed underground bunker, Matsushiro Dai-honei Peace Memorial Hall

（Received December 23, 2020）